

図書館だより 第6号

発行：図書委員会

皆さん、もう明野アクロスタウンには行かれましたか？

私たち図書委員会は、去る6月9日、アクロスタウン内にできた紀伊国屋書店へブックハンティングに行きました。ブックハンティングとは、自分たちが読みたい、また図書館に置いて他の人にも読んでもらいたいと思う本を、実際に書店に行き、自分たちで選ぶという企画です。

そこで図書委員が選んだ本は13冊。その書評を、選んだ図書委員に書いてもらいました。



ダ・ヴィンチ・コード

ダン・ブラウン著

映画で話題のダ・ヴィンチ・コードです。

この本では今まで当たり前だと世界中で信じられていた事が、実はそうではないかもしれないと考えさせられます。

イエス・キリストの結婚について・聖杯とは一体何なのか？という疑問をレオナルド・ダ・ヴィンチの描いた2つの絵画『最後の晩餐』、『モナ・リザ』に隠された秘密の暗号を解くことで導いていきます。

今まで自分が思っていた『当たり前』が本当は違うかもしれない、真実は誰もが忘れ去っているかもしれないという事に気付く本だと思います。

スワロウテイル

岩井俊二著

「リリイ・シュシュのすべて」、「花とアリス」などの作品、そしてこの本の作者でもある岩井俊二監督の1996年公開の同名映画の原作本です。

この作品は、架空都市「円都(イェンタウン)」で繰り広げられる物語です。祖国も違えば年も性別も違う、円都で生きているあるイェンタウンの人々の友情を軸として、売春、ヤクザ、不法入国、殺人など少し重いとも思える内容を、時に面白く、時に感動的に描いています。各人物の過去や背負っているもの正体など様々で、どの人物も個性あふれる魅力的です。また、映画とは少し登場人物の設定や名前、出てくるキャラクターが違ったり、話の展開・結末も違ったりして、別の話として楽しめると思います。本を読んでから映画を観るとこの本の違った面白さが楽しめると思います。



導きの星

小川一水著

この本は、地球外惑星に発生した知的生命体候補を導き成長させる観察官に志願した辻本司と3人の女性型パーパソイド、そして、成長し歴史を紡いでいくスワリスたちとの交流を描く物語です。主人公とそれを取り巻く3体の女性型パーパソイドのやりとりもとても楽しく、また、何が文明を形作るのか、そんな命題も含んでいる、楽しくも考えさせられる作品です。

※シリーズ作品です

シャーロック・ホームズの生還

コナン・ドイル著



小説家、コナン・ドイルが生み出した名探偵シャーロック・ホームズの事件を書いた小説です。この本には、子どもの落書きに見せかけた暗号をホームズが解くという暗号解読の傑作「踊る人形」が収録されています。この事件は、ホームズの頭の良さに、驚かされます。また、そのほかにも「六つのナポレオン胸像」「ノーウッドの建築業者」など、ドイルの傑作が全十三編収録されています。暗号に自信のある方はホームズより先に解いてみてはいかがでしょうか？

※画像が実際の本と違います。すみません。

顔に降りかかる雨

桐野夏生著

お察しの通り、この本は推理小説である。しかも、女流ハードボイルドという位置づけらしい。固茹で卵だ。しかし、この作品は完全なる固茹でではなく、若干の半熟といった感じで、それがこの作品を特徴付ける良いものとなっている。

さて、物語は、主人公、村野ミロの親友であるノンフィクションライター宇佐川耀子が、1億円を持って消える、と言うところから始まる。展開は二転三転していくが、特に中盤からはグイグイと話に引き込まれて仕舞う。結末が近づくにつれてドンドン読むスピードが早くなり、一気に読み上げて仕舞う程面白い。

全体的に暗澹とした雰囲気や奇抜な設定だが、その奇異さだけで読ませようとは決してしていない。推理小説好きにはもちろん、推理小説に興味があるけれど読んだことがない人にも、ぜひ試しに読んでみることをオススメする。



女子の法則



この本では女性向けケータイポータルサイト girlswalker.com 内の「アンケートwalker」にて行われたアンケートの回答をもとに集計されたデータが書かれています。

Contents1には「女子の真実」として『「初対面の男子は服装で判断する」が約75パーセント。』や『好きな人の前で歌う曲、第1位は大塚愛の「さくらんぼ」。』など、Contents2では「女子の法則」として『ケータイアドレスに「love」入り女子は彼氏アリ…の法則』や『「男女の友情はアリ！」派女子のほうがモテる…の法則』など、アンケートを基にして統計学的に結果を出しています。

神様のパズル

機本伸司著

この本は、ずばり「宇宙は作ることができるのか？」という事について書かれた本です。『宇宙は無からできたの？「無」なんてそこら中にあるじゃん？だったら、人間にだって宇宙を作れるんじゃない？』

そんな発想にいたった天才少女と、ダメ大学生のお話です。宇宙とか物理が大好きな方には無条件でオススメです。わかったふりが出来る人にもオススメ(笑)

少し興味があるかな～、程度でもしっかり楽しめると思います。

是非、読んでみて下さい！





まひるの月を追いかけて 恩田陸著

日常と非日常とが混ざり合った、何処か霞が掛かったような物語。この本の著者である恩田陸さんの物語を例えると、このような感じである。

古き都奈良を舞台に、主人公、静と異母兄の渡部研吾、その恋人の君原優佳利そして、研吾と優佳利の友人である藤島妙子という複雑な関係の4人がそれぞれの役を演じながら旅をする、単独一人称で書かれたものである。研吾が奈良で失踪し、優佳利と静が彼を捜しに二人で旅に出る、というところから物語は始まる。

物語の中核は、研吾が奈良で辿った道と同じ道程を、二人で辿りながら、絡み合う人間関係、それぞれの思惑、過去、現在、そして、現実と夢の間を行きつ戻りつしながら旅をしていく、というものだ。そして、ただひたすらに、淡々と物語は進んでいくが、濃密な人間の内面描写が、読者を物語へと引き込んで仕舞う。

この本は、終止独特の雰囲気書かれている。人によって良否が別れるかもしれないが、是非一度、試しに読んでみることをオススメする。もしかしたら、自分の人生について深く考える、良いきっかけになるかもしれない。

クトゥルフ神話ガイドブック

「クトゥルフ神話」をご存知でしょうか。ヨグ・ソトース、アザトース、ニャルラトテップ、トラペゾヘドロン、ネクロノミコン、狂気山脈、這い寄る混沌など。どれか一単語は聞いたことがあるのではないのでしょうか。神話にもいろいろありますが、そのどれもが信仰のあった神々のことを綴ったものです。しかしこの「クトゥルフ神話」は、「造られた神話」。19世紀から20世紀にかけてという、神話と呼ぶにはあまりにも近代に作られた神話なのです。

神々の対立や恋愛、荘厳なる戦いなどを綴ったものではなく、主人公があまりに大きすぎる恐怖存在に相対し、しだいに狂乱していくという、むしろホラーと呼ぶべき物語です。

この本は、各メディアで使われるクトゥルフ神話についてのガイドブックです。本やゲームで使われた単語のルーツ（元ネタ）をヒストリーつきで解説しています。そのようなあらゆる媒体を通してクトゥルフ神話を読み解く、という本です。また、章と章の間に挟まれるエピソードも巧妙に作られています。

宇宙規模の壮大な恐怖存在。日常に疑念を抱く日常を、夏の夜に、いかがかな？



キマイラの新しい城 殊能将之

フランスの古城を移築したテーマパークの社長が、古城と一緒にやってきた城主の幽霊にとり憑かれてしまう。そして社長＝領主は「私を殺した犯人がわかるまで成仏できない。専門家に調べさせろ」と言う。そこで呼ばれる専門家——名探偵石動戯作。

……一見バカですが、実際はとてもおバカです。(誉め言葉)

現代でも殺人事件が起こり、ダブルで謎を解明していかなきゃならないんですが、何かこっちの方がオマケみたいです。

逸脱なのは城主のロポンギルズ（六本木ヒルズ）攻防戦。読めば読むほど、六本木ヒルズに行ってみたくなります。

雑学図鑑 知って驚く!!街中のギモン 110 日刊ゲンダイ・編

「のり弁のおかずはなぜ魚フライとちくわ天なのか」「ジーンズの小さなポケットはなんのため?」……世の中にある、ふとしたときに気がつく、別に知らなくても困らないけど気になるというようなギモンと、その答えが紹介されている本です。読んでいくと新しい発見が沢山あり、次々と出てくるQ&Aをどんどん知りたくなる内容です。

知らなくても困らないけど知っているといざとき便利だったり、「うんちく」として、覚えておいたり面白いと思います。暇なとき、何か新しく知りたかったとき、どうしても気になることの答えが知りたいと、思ったときなどこの本を読むと何か見つかるかもしれません。



砂糖菓子の弾丸は撃ちぬけない 桜庭一樹著

山田なぎさは、誰よりも早く「実弾」を欲しがっている中学生。

転校生、海野藻屑は彼女はなぎさと正反対に、自分を人魚だと言い張り嘘ばかりつく「砂糖菓子の弾丸」を撃つ少女だった。二人の友情は、嵐の日まで悲劇に向かって疾走していく……。

この話の出来事は、実際に起こっている出来事。けれど実際に自分が藻屑のような少女に会っても、何も出来ないのだろうと思い知らされる絶望感。私はこれを読んでしばらく落ち込みました。

藻屑が人魚であって欲しい、と本当に思いました。そんな事はありませんのだけど。ライトノベルですが、大人にも読んで欲しい。切実にそう思う本です。



フリッカー式 佐藤友哉著

この本の主人公は壊れています。この本の主人公の家族は全員壊れています。

この本は主人公の一人称形式で語られます。少しアレな主人公が巻き込まれ引き起こす事件。それと平行して、進行していくもうひとつの物語。二つの物語が重なる時、馬鹿げた世界の幕が上がる。

実は僕は続きが気になる、といったことがあまりありません。けれどこの「フリッカー式」は、そんな僕がどんどん読み進むほど爽快な文章で綴られています。とても読みやすく、一気に読みに最適です。読みだしたらもう止まらない。早い人ならほんの三十分か一時間で読み上げるんじゃないでしょうか。

以上、それぞれの個性溢れる本の選択および書評、いかがでしたでしょうか？

本当はもっと沢山書評を書いてくれた人もいたのですが、スペースの都合上、大幅カットされている人もいます。申し訳ありません。

もうすぐ夏休み。皆さんの本選びの参考になれば幸いです。

平成18年7月24日 図書委員長 5E 松下容子

